

『子ども』イメージの形成に及ぼす家族生活
 ——青年女子に対する調査から——
 岡野雅子（群馬女子短大）

〈目的〉 近年のアメニティ追求の時代風潮、合計特殊出生率の急激な減少、さらには「いじめ」や不登校などの諸現象から“子ども嫌い”“人間嫌い”とも言うべき傾向が進行しているように思われる。一方、子育ては難しい・苦痛である、と思う親の割合は高い。子育ては、ヒトの発達初期の特徴からして自らの要求を充分に出せない赤ん坊に対してこちら側がその表情・態度から洞察して汲み取る努力を要請し、こちら側の決めたスケジュール通りにいつもことが運ぶわけでもなく、効率性は著しく劣るものである。本研究では、これから親になる世代である青年女子を対象に『子ども』に対するイメージの形成にかかわる要因とは何か、自らがそこで育った家族生活とどのように関連しているかについて探った。

〈方法〉 質問紙調査法。対象者は2年制大学に在学する女子学生で、保育専攻者53名その他専攻者(家政・国文・経営情報)379名の計432名。調査実施時期は平成7年12月。

〈結果と考察〉 ①子どもは「かわいい」「見ていると楽しい」「興味がある」「遊ぶのが好き」「抱きしめたくなる」等の項目に7～8割が肯定し、「泣き声は耳ざわり」「うるさいとイライラする」等の項目に5割が否定する。②子どもイメージ得点により3群に分けると、家族についての認識のうち「互いに分かり合っている」「よく話す」「頼りになる」「明るい」に有意差があり、「幸せだ」「仲がよい」には差がない。③家族と自己とのかかわりは「家族に対してイライラ(しない)」「将来の家庭生活を想像する」「育った家庭のような家庭を創るだろう」に有意差があり、「家庭の仕事をする」「家にいるとほっとする」「家族の生活に満足している」「親と一緒に行動する」は差がない。④これらの結果から家族の相互理解に基づいた信頼感の存在の有無が『子ども』イメージ、さらには人間に対するイメージの形成と深くかかわると思われる。